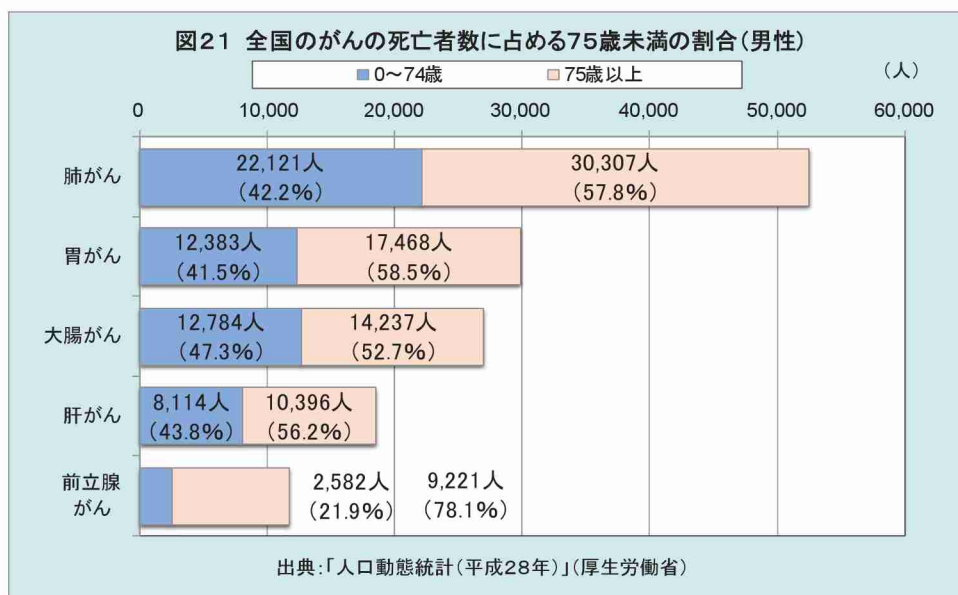
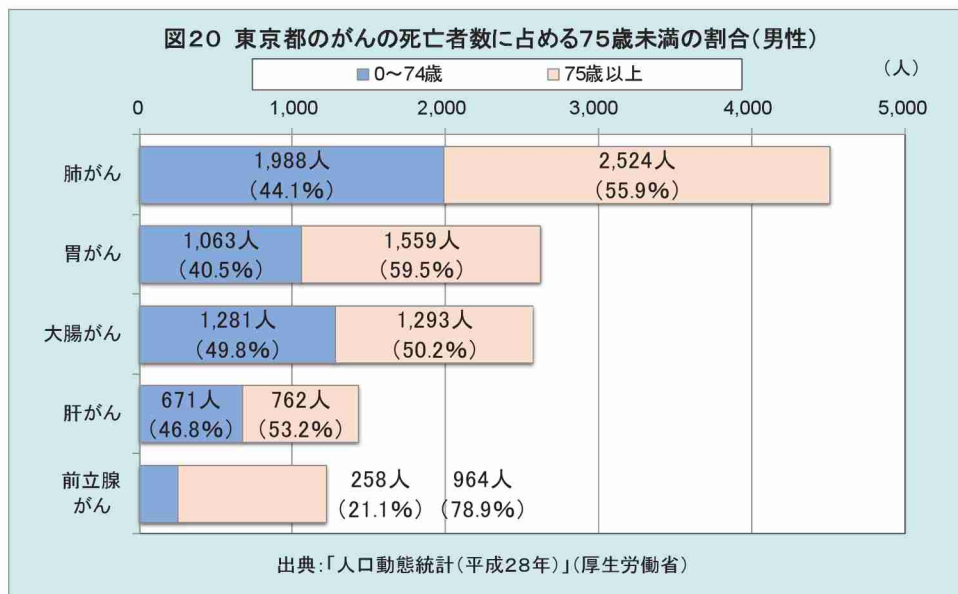
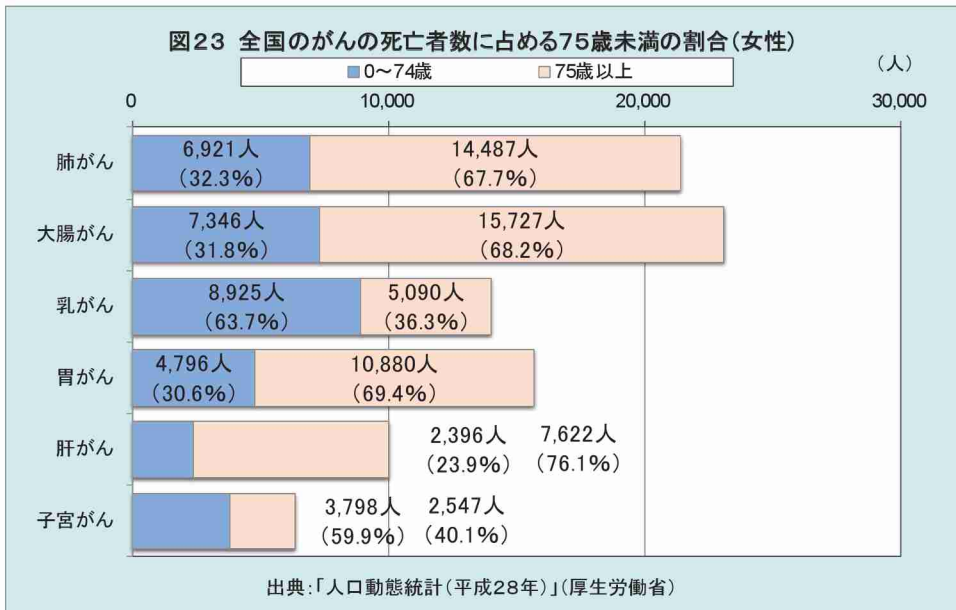
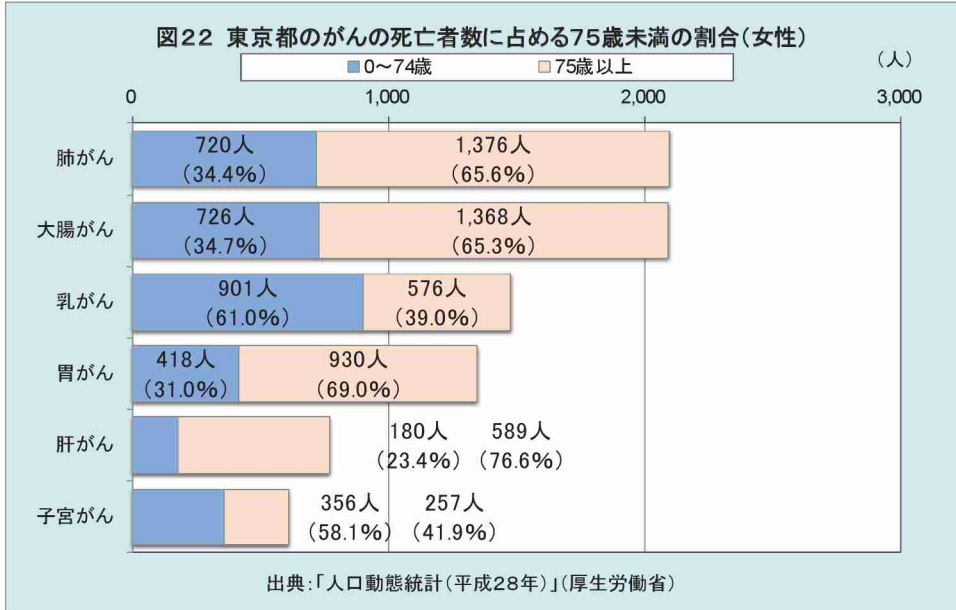


<部位別の75歳未満のがん死亡者数の割合>

- 部位別のがんの死亡者数を75歳未満と75歳以上で分けた場合、男性では、都も全国も、前立腺がんによる75歳未満の死亡者が約2割と、他のがんより75歳未満の死亡者の割合が低くなっています。また、肺がん、大腸がん、肝がんで、都の75歳未満の死亡者の割合が、全国を上回っています(図20・21参照)。



○ 女性では、都も全国も、乳がん及び子宮がんによる75歳未満の死亡者が約6割と、他のがんより75歳未満の死亡者の割合が高くなっています。また、肺がん、大腸がん、胃がんで、都の75歳未満の死亡者の割合が、全国を上回っています（図22・23参照）。



(4) がんの推計患者数の推移

～2025年をピークに人口減少も、65歳以上の人口は増加～

<都民のがんの推計患者数>

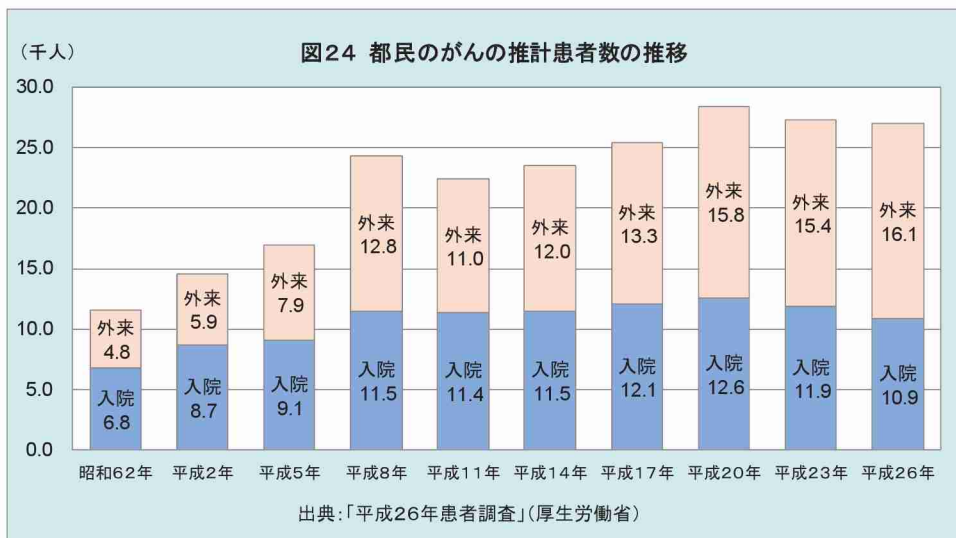
- 平成26(2014)年10月における1日のがんの推計患者数¹²は約2万7千人であり、都民の推計患者総数の約3%を占めています(表2参照)。

表2 都民の推計患者数のうち悪性新生物が占める割合

		入院	外来	合計
都民の推計患者数(千人)		101.6千人	760.0千人	861.6千人
	うち悪性新生物	10.9千人	16.1千人	27.0千人
		10.7%	2.1%	3.1%

出典:「平成26年患者調査」(厚生労働省)

- 1日のがんの推計患者数を入院、外来の別に見ると、入院患者が約1万1千人、外来患者が約1万6千人であり、外来患者が多くなっています。推計患者数の推移は、近年、横ばいであるものの、長期的には増加傾向にあります(図24参照)。



¹² 「推計患者数」: 調査日の推計入院患者数と推計外来患者数の合計

<部位別のがんの推計患者数>

○ がんの部位別で入院患者数と外来患者数を見ると、都も全国も、特に乳がん、前立腺がん、大腸がんで入院患者数と外来患者数に開きが大きく、外来患者数の方が多くなっています（表3参照）。

表3 東京都と全国のがんの推計患者数(部位別)

	東京都				全国			
	入院10.9千人		外来16.1千人		入院129.4千人		外来171.4千人	
1位	大腸がん	1.8千人 16.5%	大腸がん	2.5千人 15.5%	大腸がん	18.9千人 14.6%	大腸がん	28.0千人 16.3%
2位	肺がん	1.4千人 12.8%	乳がん	2.3千人 14.3%	肺がん	18.8千人 14.5%	乳がん	24.3千人 14.2%
3位	胃がん	1.0千人 9.2%	前立腺がん	1.9千人 11.8%	胃がん	13.5千人 10.4%	前立腺がん	20.0千人 11.7%
4位	悪性リンパ腫	0.6千人 5.5%	肺がん	1.5千人 9.3%	悪性リンパ腫	7.4千人 5.7%	胃がん	19.2千人 11.2%
5位	食道がん	0.5千人 4.6%	胃がん	1.3千人 8.1%	肝がん	6.9千人 5.3%	肺がん	16.1千人 9.4%
6位	肝がん	0.5千人 4.6%	甲状腺がん	0.8千人 5.0%	膵がん	5.6千人 4.3%	悪性リンパ腫	6.6千人 3.9%
7位	膵がん	0.5千人 4.6%	膀胱がん	0.7千人 4.3%	乳がん	5.4千人 4.2%	膀胱がん	6.4千人 3.7%
8位	乳がん	0.5千人 4.6%	悪性リンパ腫	0.6千人 3.7%	食道がん	4.9千人 3.8%	肝がん	5.5千人 3.2%
9位	前立腺がん	0.5千人 4.6%	肝がん	0.5千人 3.1%	前立腺がん	4.9千人 3.8%	甲状腺がん	4.2千人 2.5%

出典:「平成26年患者調査」(厚生労働省)

<がんの年齢階級別罹患率>

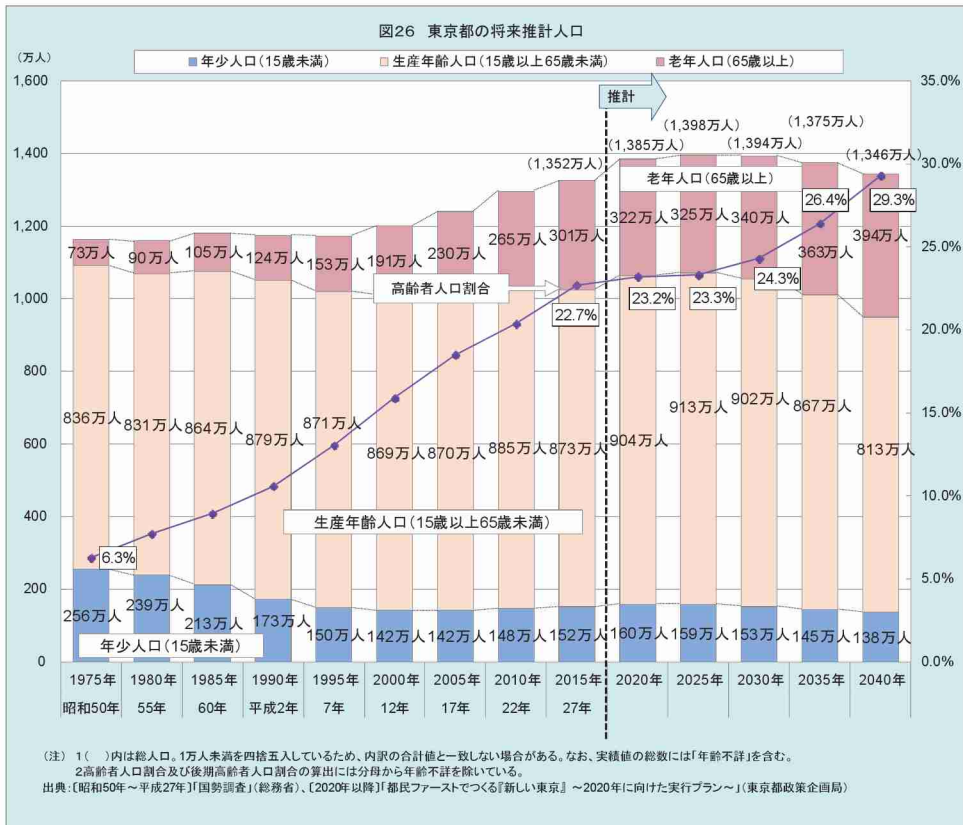
○ 年齢階級別のがんの罹患率を見ると、男女とも年齢に合わせて上昇し、特に50歳代頃から大きく上昇しています。20歳代後半から50歳代前半にかけては女性の方が高いですが、60歳代以降は顕著に男性の方が高くなります（図25参照）。



＜高齢化の進行とがん患者の増加＞

○ 平成 27（2015）年の都民の高齢化率は 22.7%ですが、平成 42（2030）年には 24.3%になると推計されており、都民のおよそ 4 人に 1 人が 65 歳以上の高齢者になることが予想されます。また、東京都の将来人口は平成 37（2025）年をピークに減少に見込まれますが、その一方で 65 歳以上の老年人口は増加し続けると推計されています（図 26 参照）。

○ 平成 28（2016）年の都民のがんによる死亡者数のうち、約 85%を 65 歳以上が占めており、今後も高齢化に伴う、都民のがん患者数やがんによる死亡者数はますます増加していくことが見込まれます。



2 東京都のがん医療における地域特性

【東京都のがん医療の地域特性】

- 高度ながん医療を提供できる大規模な医療機関が、区中央部を中心に集積
- 二次保健医療圏の平均人口は全国の約 2.8 倍であり、がん患者も多い
- 交通網の発達により、患者は都道府県や二次保健医療圏を越えて受療
- 「東京都小児がん診療連携ネットワーク」での相互連携による小児がん医療提供体制の整備
- 都内には在宅療養を支える医療機関が数多くあるが、「自宅で最期を迎えたい」がん患者のために、一層の在宅療養環境の充実が必要

(1) 高度・大規模な医療機関の集積

- 都内には、高度な診療機能を有する医療機関が多く存在します。高度な医療の提供等を行う特定機能病院¹³については、平成 29（2017）年 4 月 1 日現在、全国で 85 施設が指定されており、この約 18% に当たる 15 施設が都内に所在し、さらに、このうち 6 施設が区中央部の二次保健医療圏¹⁴に所在します。
- また、病床 500 床以上の大規模な病院は、平成 28（2016）年 10 月 1 日現在、全国で 418 施設あり、この約 12% に当たる 49 施設が都内に所在します（表 4 参照）。
- このように、都内には、区中央部二次保健医療圏を中心に、高度ながん医療を提供できる大規模な医療機関が集積しています。

表 4 病床の規模別病院数(全国数における東京都の割合)

	全国	左記のうち東京都	
20～49床	919	87	9.5%
50～99床	2,120	168	7.9%
100～199床	2,754	199	7.2%
200～299床	1,136	59	5.2%
300～399床	706	53	7.5%
400～499床	389	36	9.3%
500床以上	418	49	11.7%
合計	8,442	651	7.2%

出典：「医療施設調査(平成28年)」(厚生労働省)

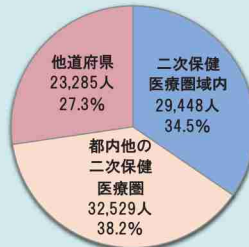
¹³ 「特定機能病院」：高度の医療の提供、高度の医療技術の開発及び高度の医療に関する研修を実施する能力等を備えた病院として厚生労働大臣が承認する病院

¹⁴ 「二次保健医療圏」：原則として特殊な医療を除く一般の医療ニーズに対応するために設定する区域で、入院医療を圏域内で基本的に確保するとともに、医療機関の機能連携に基づく医療サービスと広域的、専門的な保健サービスとの連携などにより、都民に包括的な保健医療サービスを提供していく上での圏域であり、その整備を図るための地域的単位

(2) 二次保健医療圏を越えるがん患者の受療動向

- 都には、日本の全人口の1割強に当たる約1,362万人が居住しています。都内に13ある二次保健医療圏の一圏域当たりの平均人口は約105万人であり、全国平均である約37万人の約2.8倍となっています。
- 平成26(2014)年の1年間でがん診療連携拠点病院等を受療したがん患者のうち、医療機関の所在地と異なる都内の二次保健医療圏に居住する患者の割合は38.2%です。また、他道府県に居住する患者の割合は27.3%であり、他の二次保健医療圏や他の道府県から受療する患者の割合が高い傾向にあります(図27参照)。この傾向は、特に区中央部の医療機関で強く、約9割が区中央部以外の患者です(図28参照)。

図27 都内における他道府県又は他圏域に居住するがん患者割合



出典:「がん診療連携拠点病院(25か所)、東京都がん診療連携拠点病院(8か所)及び地域がん診療病院の平成26年院内がん登録件数」(東京都福祉保健局独自調査)

図28 都内(二次保健医療圏別)における他道府県又は他圏域に居住するがん患者割合



出典:「がん診療連携拠点病院(25か所)、東京都がん診療連携拠点病院(8か所)及び地域がん診療病院の平成26年院内がん登録件数」(東京都福祉保健局独自調査)

- このように、都においては、発達した交通網により、比較的短時間での移動が可能なため、多くのがん患者が、高度かつ専門的な診療機能を有する医療機関を、都道府県や二次保健医療圏を越えて受療しています。

(3) 医療機関の専門性を活かした診療連携に基づく小児がん医療

- 小児がんは、主として15歳までの小児に発生する希少がんの総称です。都の地域がん登録データによると、平成24(2012)年1年間の15歳未満のがん罹患数は271人となっています(表5参照)。

表5 東京都の15歳未満のがん罹患数

	男女計	男	女
0～4歳	123人	68人	55人
5～9歳	56人	35人	21人
10～14歳	92人	49人	43人
合計(15歳未満)	271人	152人	119人

出典:「東京都のがん登録(2012年症例報告書)」(東京都福祉保健局)
(平成29(2017)年3月1日時点データ)

- 15歳未満のがんによる死亡者数は、全国では255人ですが、都では27人で、全国の10%を超えています(表6参照)。

表6 15歳未満のがんによる死亡者数(全国数における東京都の割合)

	全国	左記のうち東京都	
0～4歳	76人	7人	9.2%
5～9歳	84人	10人	11.9%
10～14歳	95人	10人	10.5%
合計(15歳未満)	255人	27人	10.6%

出典:「人口動態統計(平成28年)」(厚生労働省)

- 患者の総数が少なく、さらに、がんの種類によって治療方法等が異なるため、医療機関ごとに小児がん治療の専門分野は分かれます。そこで、都では独自に、高度な小児がん診療機能を有する病院による、「東京都小児がん診療連携ネットワーク¹⁵⁾」を構築し、医療機関同士の相互連携に基づく診療体制を整備しています。小児がん患者とその家族が、安心して適切な治療や支援を受けられるよう、同ネットワークに参画する病院が、それぞれの専門性を活かしつつ診療連携を行うのが、都の小児がん診療の特徴です。

(4) 一層の充実が望まれる在宅療養環境

- 都には、在宅療養を支える在宅療養支援診療所¹⁶⁾が1,556施設、在宅療養支援病院¹⁷⁾が97施設あります¹⁸⁾。

15 「東京都小児がん診療連携ネットワーク」: 98 ページ脚注 100 参照

16 「在宅療養支援診療所」: 在宅で療養している患者や家族の求めに医師や看護師らが24時間体制で応じ、必要であれば訪問診療や訪問看護を行う診療所

17 「在宅療養支援病院」: 在宅で療養している患者や家族の求めに医師や看護師らが24時間体制で応じ、必要であれば訪問診療や訪問看護を行い、患者の緊急時における入院体制を確保した病院

18 「在宅医療にかかる地域別データ集(平成28年3月31日時点)」(厚生労働省厚生局)による。

- がんによる死亡者の死亡場所は、都では 79.8%が病院・診療所、16.4%が自宅です。全国では 84.9%が病院・診療所、11%が自宅であり、都の方が自宅で死亡する割合が高くなっています（表7参照）。

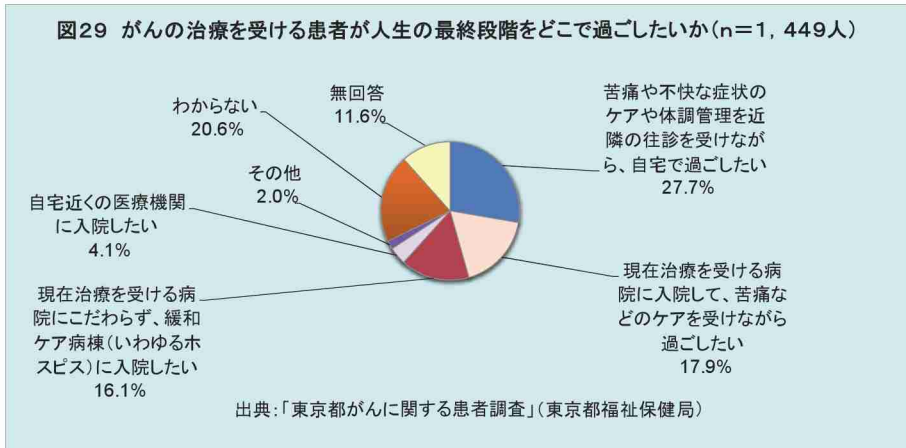
表7 がんによる死亡者の死亡場所別割合

全国			東京都		
病院・診療所	自宅	施設※	病院・診療所	自宅	施設※
84.9%	11.0%	3.3%	79.8%	16.4%	3.2%

※この項目における「施設」とは、介護老人保健施設及び老人ホームを指す。

- 「東京都がんに関する患者調査」¹⁹によると、人生の最終段階（終末期）をどこで過ごしたいと思いますかという設問²⁰に対し、「自宅で過ごしたい」という回答が 27.7%で最多でした（図29参照）。また、20歳以上65歳未満の都民を対象に都が実施した調査²¹においても、38.2%が「自宅で最期を迎えたい」と回答しています。

図29 がんの治療を受ける患者が人生の最終段階をどこで過ごしたいか(n=1,449人)



- 都には、在宅療養を支える医療機関が数多くありますが、高齢化に伴うがん患者の増加に向けて、がん患者が自ら希望する場所で人生の最終段階（終末期）を迎えられるよう、一層の在宅療養環境の充実が望まれます。

19 「東京都がんに関する患者調査（平成29年3月）」（東京都福祉保健局）による。都内のがん診療連携拠点病院、地域がん診療病院、東京都がん診療連携拠点病院及び国立がんセンター中央病院に入院・通院するがん患者を対象とした調査。本調査は以下「東京都がん患者調査」という。（各病院の概要は51ページ参照）

20 あなたがもし人生の最終段階（終末期）を迎えることになった場合、という仮定のもとで質問している。

21 「高齢者施策に関する都民意識調査（平成28年）」（東京都福祉保健局）による。